地域での生活に不安感を訴える精神障害者の認識が，前向きに変化するときの看護の視点
―精神科訪問看護における不安神経症患者との関わりを通して―

松脇百合子（応用看護学）

【キーワーズ】　不安神経症，対象特性，不安感，精神科訪問看護，認識

本研究は，地域での生活に不安感を訴える精神障害者に関わることで，障害者の認識が前向きに変化する時の看護師の認識と言動の特徴を明らかにし，そこから看護実践上の視点を取り出すことを目的している。研究対象は，一事例11場面に対する自己の看護過程である。研究方法は，研究素材から≪対象の言動・状況≫≪看護師の認識と言動の特徴≫≪看護師の言動≫≪関わりの意味≫となる分析フォーマットを作成し，≪看護師の認識と言動の特徴≫を取り出した。更に，これらの共通性と相違性を比較検討し，以下のような看護の視点を導き出した。

1．患者の会話の中に作業能力や対人関係の改善が見られたときは，それを言葉で表現して成長を認める。
2．疲労時の睡眠の重要性や，これからの希望する生活の在り方を患者が語った時は，患者の判断を受け入れる。
3．生活の中で様々な複雑なことが生じた時，優先順位を判断して一つ一つ解決していくよう，プライドに気を付けてその旨を伝える。
4．患者が，自信がなく不安な状態のときは，看護師が近くにいていつでも相談にのってよい旨を伝える。それとともに最終時には患者のほうで決断，行動できるように伝達する。
5．親しい人との死別，疲労感や不安感を訴えるなど，患者の生命力の消耗に繋がるような状況が見られたときは，過去の自己の成功体験や考え方を含む生活体験を想起させる。
6．患者の表情やその他の様子から精神状態ならびに身辺に起きた出来事を，予想した上で会話を進め，また，その他の関わり方の方法を選択する。
7．患者が家族内の心配事や辛い体験を語った時は患者の大変さに，また病に対する開き直りや看護師への感謝の気持ちを表現した時は気持ちをくみ取り共感する。
8．患者が，家族の看病の大変さを体験することや過去の自分を振り替えられるように，人への立場の変換を促す。
9．対人関係のトラブルの原因や精神的なストレスが身体に影響すること，過去の成功体験などを振り返らせ客観視できるように関わる。
10．闘病に対する努力や苦手なことに挑戦する前向きな姿勢が見られたときは，それを認め，言葉に出して賞賛する。
11．患者が，立場の変換を行った会話が聞かれたり，家族の病気への対応などこれまで見られなかった患者の持てる力や言動が現れた時は，その都度，言葉で表現して賞賛する。
12．患者の様子から，不安感や心配事を抱くといった生命力の消耗が予測される時は，それを言葉で表現できるように関わる。